第４期総括詳報

オンラインで現地視察

形式変えて147人が修了

311 次世代塾 伝える／備える

東日本大震災の伝承と防災の担い手育成を目的に河北新報社などが開く通年講座「３１１『伝える／備える』次世代塾」の第４期は14回の講座を終え、１４７人が修了した。新型コロナウイルス感染予防の一環で、今期は当初の計画から講座の内容や形式を変更。今月13日に予定していた修了式は中止した。

宮城県内を中心に東北、関東、関西を含む15大学の学生や若手社会人ら１７８人が登録。修了証は大学などを通して交付した。

新型コロナウイルスの影響で昨年５～８月は対面式の授業を行わず、ウェブで「救急救命の現場」「避難の現場」「事業継続・地震保険」「子どもの心のケア」をテーマに、授業を収録した動画を配信した。

現地視察はオンライン中継に切り替えた。９～12月に石巻市、気仙沼市、名取市、宮城県南三陸町の津波被災現場と受講生をビデオ会議アプリで結び、講師が被害の状況や復興の歩みなどについて講義をした。各地域に関連する動画も授業として配信した。

今年1月は「震災の教訓」をテーマに、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスで、初めて対面式の授業を行った。

次世代塾は第5期（２０２１年４月～22年３月）も開催する。募集要項と講座の概要は後日、発表する。

次世代塾は「３１１次世代塾推進協議会」が運営する。構成団体は河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台白百合女子大、宮城大、仙台大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。

次世代塾第４期を修了した東北の11大学の学生の中から、期末レポートの一部を紹介する。

【受講生の声】

打ち明けて楽に

私は内陸部出身で震災後、津波で被災した沿岸部の人に罪悪感や申し訳なさを感じていました。質問で講師にそのことを打ち明けると「たまたま自分たちのまちで起きただけ。他の場所で起きてもおかしくなかった」と答えてくれ、少し気が楽になりました。（**仙台市青葉区・東北福祉大１年・三浦真穂さん・19歳**）

風化防止が大切

震災時の状況を当事者に初めて聞いて、想像をはるかにしのぐ現実があったと分かりました。自分の身に降りかかったときに何ができるか考えさせられました。私たちに求められるのは風化させないこと。被災地の実情や被災者の思いを伝えていきたいと思います。（**仙台市泉区・宮城大３年・関根諒さん・21歳**）

心の回復はまだ

名取市閖上地区を支援する大学のボランティアチームで活動しています。講座で他の被災地の様子にも触れ、10年を経ても住民の心に当時の記憶が強く残り、建物は新しくなっても心は元通りになっていないことが分かり、価値観が大きく変わりました。（**仙台市太白区・尚絅学院大１年・高橋楓さん・19歳**）

動画見て鮮明に

震災時、地元秋田も停電し、ラジオで聞いた津波被害の様子を次世代塾で鮮明に学ぶことができました。動画配信の授業でしたが、講師の訴えは強く伝わってきました。記憶や経験を風化させないように、災害を伝え、備えなければなりません。（**仙台市青葉区・宮城学院女子大２年・梁瀬菜月さん・20歳**）

自然の力侮らず

被災地は震災前まで決して特別な場所ではなく普通の日常があったこと、明日は当たり前に来るとは限らないことを講座を通して実感しました。自然の力を侮らず、判断に迷ったら安全を最優先して行動することを次世代に伝えたいと思います。（**東松島市・東北学院大２年・阿部修治さん・20歳**）

伝承へ経験積む

「人から人に伝えることが大切」という名取市閖上中央町内会の会長さんの言葉が心に残りました。語り継ぐことは当事者だけではなし得ません。伝えられれば次に備える大きな力にもなります。伝承の担い手の一人になれるよう経験を重ねたい。（**仙台市青葉区・宮城教育大１年・高田瑶香さん・20歳**）

想定 備えの契機

遠隔地での災害もひとごとと思わず、自分ならどうするかと、想定することも備えるきっかけになります。震災の犠牲者を思い「復興とは何か」と問い続けることも大切です。講師の言葉の重みを受け止め、伝えること、備えることに継続して取り組みたい。（**山形市・山形大４年・勝又以杏さん・22歳**）

現地訪ね勉強を

被災地で過去にも津波被害があったことや、風化して津波への恐怖心が薄れ、多くの人が犠牲になったことを講師から聞いて、もっと学校の授業などで災害を語り継ぐ必要があると考えました。コロナが落ち着いたら現地を訪ね、勉強したいと思います。（**仙台市太白区・東北工大１年・佐藤壮晃さん・19歳**）

覚悟と「熱」持つ

若い人の発信は風化に歯止めをかけますが、自分が震災を語って良いのかという葛藤がありました。講師の話を聞いて、二度と悲しみを繰り返さないという覚悟を持ち、目の前の見えない壁を溶かす「熱」を持って同年代や下の世代に伝えていきたいと思いました。（**仙台市青葉区・東北大２年・喜多亮介さん・21歳**）

発信者だと自覚

他の受講生の話から、自分も発信者だと自覚しました。被災経験に関係なく誰もが命の大切さを伝え、備えを訴えれば大川小の校歌の題名通り「未来を拓（ひら）く」ことになると思います。青森で中学生の防災教育に携わり、自分と大切な人の命を守れるよう発信したい。（**弘前市・弘前大２年・佐々木友喜さん・20歳**）

元通りが復興か

次世代塾のオンライン講座をきっかけに、自分で沿岸の被災地を訪ねました。更地の先に海が見える風景の中に、津波到達地点や浸水区域などがありました。復興したと言われていますが、復興とは元通りになることではないのかもしれないと感じました。（**仙台市青葉区・仙台大３年・宍戸翔紀さん・21歳**）